

REPORT

栄養と食事療法について

当院では、1日約850食のお食事を提供しています。私たちは「食」を通じて毎日リハビリテーションに励まれている患者様を支えるという思いを胸に、3つのことを大切にしています。1つ目は、食品衛生に準じた「安心・安全な食事提供」です。2つ目は、治療の一環として栄養バランスの良い食事や疾患(高血圧症や糖尿病など)に応じた食事による「健康増進」です。3つ目は、入院生活における「楽しみ」です。食事は入院生活の楽しみであり、美味しい食事は癒やしや活力となります。その他、脳卒中の後遺症により嚥下障害が生じた患者様にとっては「口から食べる楽しみ」、季節の食材や暦に因んだ食事を通じた「季節や文化を感じる楽しみ」、入院患者様同士で同じテーブルを囲んで食べる「和(和む・人と和)を感じる楽しみ」があります。栄養はリハビリテーションを行い機能・活動・参加を向上させるための土台となり、食事療法は再発予防の基本となります。医師、看護師、リハ専門職等をはじめとする多職種が協働し、患者様をサポートしています。体調や心身機能の変化に応じて食事内容を調整し、美味しく食べていただけるようチーム一丸となって取り組んでいます。



新規送迎車導入「公益財団法人JKA補助事業活用」について

特別養護老人ホーム「こくらの郷」は、医療法人共和会の関連施設として、2007年6月より小倉南区高野で運営しています。デイサービスやショートステイも併せて運営しており、リフト付き送迎車が日々活躍しています。この度は、『競輪とオートレースの補助事業』より購入価3/4の補助をいただき、新規車両を整備することができました。今後も送迎サービスやお出かけ活動など、地域との連携に努めて参ります。

社会福祉法人松寿会「こくらの郷」



◆当院へのアクセス

JRの場合

「南小倉駅」(日豊本線・日田彦山線)より片野方面へ徒歩10分

バスの場合

「木町二丁目」バス停(ファミリーユサ前)より小倉南区方面へ徒歩10分

都市高速の場合

「紫川IC」清水方面車線出口よりすぐ右側

カーナビでお越しの際は、

NAVI 北九州市小倉北区篠崎1丁目5-1と入力してください。



KR 医療法人 共和会

小倉リハビリテーション病院 / 介護老人保健施設 伸寿苑 / 共和会地域リハビリテーションセンター

TEL.093-581-0668 (代表) FAX.093-581-3319 (共通)

〒803-0861 福岡県北九州市小倉北区篠崎1丁目5-1 <http://www.kyouwakai.net> 共和会 検索

公式SNSで情報配信中!



Careline

KYOUWAKAI Press ケアライン 2023 新年号 / コロナ禍4年目...高齢化が進む地域への支援活動

発行 医療法人共和会 小倉リハビリテーション病院 / 連携広報部 井上崇

Careline

KYOUWAKAI Press ケアライン

2023

新年号

特集 コロナ禍4年目...高齢化が進む地域への支援活動

REPORT 栄養と食事療法について



新北九州空港連絡橋の朝焼け

新年のごあいさつ

あけましておめでとうございます。皆様のご指導ご支援により、新春を迎えることができたことに対し心より感謝申し上げます。新型コロナウイルスのパンデミックが始まり早3年となりました。いまだ収束が見通せず、さらにはロシアのウクライナへの侵略という事態による世界的な事案の発生により、なかなか先が見通せない状態で新年を迎えることになりました。共和会の使命は、「あたりまえの暮らし」を実現する支援をすることです。そのためには、患者さん、利用者さんの安全・安心が最前提であり、病院・施設内に感染を持ち込まないために、あらゆる手段を講じていきたいと考えております。コロナ禍といえども何年も潜むように活動することはできません。コロナの感染拡大が少し落ち着きを見せ始め、警戒をしつつもコロナに微妙に慣れ始めております。通常のコロナ禍前の社会生活に近い形で過ごしたくなり、日常生活の楽しみに対する要求は、せきを切ったように高まりつつあります。感染リスクという緊張感を持ちながら、地域における役割を果たすべく前向きに今年一年頑張っていきたいと思っております。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

医療法人共和会 小倉リハビリテーション病院 病院長 梅津 祐一

梅津院長
新年ご挨拶
(QRコードより)



コロナ禍4年目...高齢化が進む地域への支援活動

地域状況の変化

地域高齢者の日常生活は、新型コロナウイルス流行により、他の年齢層以上に大きな影響を受けたと思います。外出自粛の呼びかけや、感染への不安から買い物や外食、趣味の集まりなどに行かなくなり、閉じこもりがちな生活へと変化しました。また、友人や同居していない家族も訪問や帰省を自粛し、他者との交流の機会は減少しました。

地域社会に目を向けると、公共施設や店舗の一時閉鎖に加えて、芸術文化活動、祭りなどの地域行事も中止されたところが多く、このことも出かける場所や家庭外での役割喪失につながっていました。

高齢者は特に感染しないようにと生活を制限したため、低活動により身体機能や認知機能が低下した方も見受けられました。精神的にも不安や孤立を感じやすく、満足感や充実感を得られにくい状態が続いている方も多いと思われます。

一方、医療・介護サービスの利用における変化として、医療面では、受診控えや通院間隔の延長により健康管理が行いにくくなりました。さらに、感染への不安や面会制限などにより、入院や入所をためらう方や早期退院する方など、在宅での生活を選択される方が増えた印象があります。

介護サービスの利用においては、流行当初は感染への不安からサービスの利用を控えるといったこともみられましたが、現在はサービスの利用控えは減り、逆に通所系サービスが唯一の外出先となっている方もいる状況です。

現在はwithコロナの流れにより地域の催しも再開されはじめ、感染拡大時期でも外食や帰省を行う方が以前に比べて増えているように感じますが、新型コロナウイルス流行による地域高齢者への影響は令和5年も続くと思われます。

【コロナ禍前の南小倉校区の餅つき】



事業者としての活動課題

1 感染予防対策

withコロナの流れの中で人々の感染予防に対する意識は多様化してきています。またワクチンの普及により症状がわかりにくくなっている傾向もみられ、今まで以上に細やかな感染対策が求められていると感じます。通所系サービスでは、利用者だけでなく直接会うことが少ない同居家族の健康状態などの把握にも努めています。訪問系サービスでは、各家庭の雰囲気や会話から新型コロナウイルス流行に対する受け止め方や感染予防への意識を感じ取り、それぞれの家庭に合わせた感染予防対策に努めています。特に訪問看護では、利用者や介護者が新型コロナウイルスに罹患した場合にもサービスを提供するため、他の利用者に媒介しないことや自分たちの身を守るために徹底した感染予防対策を行い、支援を継続できるようにしています。

2 サービスの質向上

通所系サービスでは感染予防のため利用者同士の交流が減り、コロナ禍前のような活気が感じられなくなっています。また訪問リハでも人が集まる場への外出練習などが行いにくくなりました。そのほかデイケア旅行や忘年会、夏祭りなどの法人行事も中止されています。感染拡大の波が幾度となく来る中で、職員・利用者ともに楽しむことや活動を広げることに消極的になっている状況がうかがわれ、今後は感染予防対策を行いながら、余暇活動や友人交流、地域活動への参加など社会参加支援に改めて力を入れていきたいと思っています。

【外出支援】



発症以来3年ぶりに職場へ出かける。とても良い表情をされていた。(令和4年11月実施)

3 関係機関との連携

入院(入所)先との連携においては、コロナ禍前は退院前カンファレンスに参加していましたが、コロナ禍では書面で申し送りを受けることが多くなりました。在宅サービス全般において、利用者宅や他事業所への訪問自粛により、実際の状況を直接見ることが難しくなり、大人数での会議の自粛により支援目標について顔を合わせて話し合う機会も減少しました。リハビリテーション会議も、コロナ禍前は利用者・家族・ケアマネジャー・当院医師・事業所リハ職員の参加を基本に、他事業所にも参加を呼びかけ対面で開催してきましたが、コロナ禍においてはWebを活用した法人内の連携にとどまることが多くなっています。現在他事業所などとのWeb会議が行えるようICTを活用した連携を進めていますが、直接顔を合わせて関係を作ることの大切さを痛感しており、感染状況を見ながら事業所訪問などの外出活動の再開にも取り組んでいきたいと考えています。

【訪問リハ開始時の退院・退所前カンファレンス参加状況】

R2.3月以前退院 (n=82)	退院前カンファレンス参加 53(64.6%)	不参加 29(35.4%)
R2.4月以降退院 (n=55)	9(16.4%)	46(83.6%)

平成30年～令和3年の3年間に利用を終了した訪問リハ利用者137名の利用開始時の退院前カンファレンスの参加状況。病院などからの退院時期が緊急事態宣言発令前か後かにより大きな違いがあった。

【リハビリテーション会議】



利用者宅にケアマネジャー、訪問リハ、通所リハ職員が集まり、当院医師がWebで参加。

4 「つながり支援」の強化

コロナ禍となり利用者の家族と会って話す機会は減少し、利用者を取り巻くインフォーマルなつながりを知る機会も少なくなりました。一方で新型コロナウイルス流行の影響により、特に高齢世帯や単身世帯では生活が成り立たなくなる方を散見し、身近に支えあう関係があることの重要性を改めて実感しました。血縁や医療・介護・福祉サービスだけでない利用者のつながりを知り、利用者を支援する立場として、インフォーマルな相手とも顔の見える関係を作ること意識しながら日々の業務にあたっていきたいと思っています。

【訪問リハ利用者の地域とのつながり】

近隣住民との交流	50	137	21
友人との交流	47	131	30
同居指定ない家族や親族との交流	159	39	10
自治会・町内会での活動	3	205	0
習いごと・講座・集会等への参加	1	200	0
ボランティア	1	207	0
仕事	19	189	0

令和4年4月に訪問リハ利用者208名の地域とのつながりについて担当職員へアンケート調査を実施。近隣住民や友人との交流、地域活動への参加は少なかった。また、交流の状況について不明と答えた職員もいた。



【つながり支援】

訪問リハにて市民センターへ外出。そこでの交流の様子から地域との関係性を知る。

執筆者 小倉リハビリテーション病院 地域リハビリテーション部 訪問リハビリテーション 作業療法士 谷 江理